

スポーツ・教育振興調査特別委員会会議記録

スポーツ・教育振興調査特別委員会委員長 名須川 晋

- 1 日時
平成 28 年 9 月 1 日（木曜日）
午前 10 時 2 分開会、午前 11 時 54 分散会
- 2 場所
第 4 委員会室
- 3 出席委員
名須川晋委員長、千葉絢子副委員長、郷右近浩委員、高橋但馬委員、
菅野ひろのり委員、樋下正信委員、佐々木茂光委員、城内よしひこ委員、佐々木努委員、
中平均委員、吉田敬子委員、白澤勉委員
- 4 欠席委員
なし
- 5 事務局職員
工藤担当書記、伊藤担当書記
- 6 説明のため出席した者
岩手県立盛岡第三高等学校 副校長 木村克則氏
- 7 一般傍聴者
なし
- 8 会議に付した事件
 - (1) 調査
「参加型授業」の取組状況と課題について
 - (2) その他
次回の委員会運営等について
- 9 議事の内容

○名須川晋委員長 ただいまからスポーツ・教育振興調査特別委員会を開会いたします。

これより本日の会議を開きます。本日は、お手元に配付いたしております日程のとおり、参加型授業の取り組み状況と課題について調査を行いたいと思います。

講師として岩手県立盛岡第三高等学校副校長、木村克則様をお招きいたしておりますので、御紹介いたします。

○木村克則講師 木村でございます。よろしくお願ひします。

○名須川晋委員長 木村様の御略歴等につきましては、お手元に配付している資料のとおりでございます。

本日は、参加型授業の取り組み状況及び課題についてと題しまして、全国でも先進的な

取り組みを行っている参加型授業の現状と課題等について、詳しいお話をいただくこととしております。

木村様におかれましては、御多忙のところ、このたびの御講演を快くお引き受けいただきましたことに、改めて感謝申し上げます。

これから講師のお話をいただくことといたしますが、後ほど木村様を交えての質疑、意見交換の時間を設けておりますので、御了承願いたいと思います。

それでは、木村様、よろしく願いいたします。

○木村克則講師 改めまして、皆さん、おはようございます。岩手県立盛岡第三高等学校で副校長をしております木村と申します。

本日は、本校で取り組んでいる参加型授業について、このような場でお話しする機会をいただき、大変光栄に思っております。よい点だけではなく、課題と言える点も話し、実情をわかっただけのように説明するつもりです。どうぞよろしく願います。

お配りした資料ですが、表紙をめくるとパワーポイントの資料があります。これは、スクリーンとほとんど同じで、メモをとらなくてもいいようにしたつもりです。極力、スクリーンを見ながら、聞いていただければと思っております。

パワーポイントの資料が 14 ページまでありまして、15 ページ以降は参考資料です。参考資料も途中で何度か見ていただくことがありまして、その際はページ数をお話ししますので、よろしく願います。

さて、本日のテーマ、参加型授業ですが、盛岡第三高等学校の教員が目指している授業スタイルを象徴する言葉です。参加の主語は、もちろん生徒です。そもそも、生徒が参加しない授業はありませんので、奇異に感じられると思いますけれども、御自分の高等学校時代に受けた授業をちょっと思い出していただけますか。もしかすると、延々と続くような先生の講義を、眠気を我慢しながら聞くとか、暗唱させられるとか、文章や表などを、意味はさておき黙々とノートに写すとか、そのような感じが結構あったのではないかと思います。もしかすると、先生は、皆さんがわかっている、いなくても同じ授業をしていたかもしれません。こういった授業は、生徒が自主的に参加している授業と言えるでしょうか。これから説明しますが、それに先立ちまして、本当に少しだけですが、皆さんに盛岡第三高等学校の参加型授業の典型的なパターンを体験していただきたいと思っております。そのほうが、理解が進むということで数分間、御協力いただきます。委員長、よろしいですか。

スライドに 6 月 28 日の岩手日報で、本校の参加型授業が取り上げられた記事を書きました。字が細かくて、ちょっと見づらと思いますので、資料の一番後ろにもつけております。恐らく、この記事をごらんいただいた議会関係の方、あるいは議員さんでしょうか、興味、関心、疑問を持たれたので、今ここに私がいるのかなと思います。この記事を改めて見て、どのような興味や疑問を持つかをちょっと考えていただければと。そして、参加型授業は考えるだけではなく、発表までやりますので、御協力いただきたいと思っております。

個人で考えて、その後にペアワークというふうにしたいと思いますので、まず、個人で2分間、この記事を読んだ上で興味や疑問を頭に浮かべてください。よろしいでしょうか。では、私の時計で今から2分、少し静かにしますから、お願いします。

はい、2分です。学校ですと、生徒の活動を終了するためにブザーがビビッと鳴ります。

次に、ペアワークということで、隣同士で興味や疑問を出し合って、これだと思えるものを、たくさんあるかもしれませんが、できるだけ一つにまとめて、発表する一つを決めてほしいと思います。ペアをこういう形で勝手に決めさせていただきます。今から1分間、隣同士で思ったことを話し合ってください。では、お願いします。

はい、1分です。1分でも結構話し合えるものですよ。

全ての方に発表いただければいいのですけれども、発表してみたいという方はいらっしゃいますか。

○樋下正信委員 発表というか感想のような。

○木村克則講師 感想でもいいですよ。

○樋下正信委員 委員長と話したのですけれども、この記事を見ていて、2010年ころからですか、こういった話が出て、実際に五、六年くらいやっているようだねと、卒業生も出ているようだねと。どういった成果が出ているのかなという話や、あとは全国から多くの視察に来ていただいているようだけれども、これは話には出なかったのですけれども、他県で参加型授業を取り入れているところがあるのか、というような話が出たのですけれども。

○木村克則講師 ありがとうございます。

あともうグループくらい、いかがでしょうか。

○千葉絢子副委員長 このアクティブ・ラーニングという言葉、去年のいわて教育の日のつどいで、岩手県民会館に元慶應義塾長の安西先生がお越しになったときに、東京大学では教授からの一方的な講義ではなく、アクティブ・ラーニングが始まっているという話をお聞きして、ああ、そうなのだと思ったのがきっかけで、このアクティブ・ラーニングに興味を持ちました。

従来、私も高等学校時代を思い返してみますと、理解度に関係なく先生が一方的に講義をして、残りの2割、3割は自分たちの力でやりなさいというような、そういった指導方針だったのです。ただ、進学校にありがちな詰め込み教育をずっとやってきた中で、なぜ盛岡第三高等学校が、ある意味では授業の進度をおくらせるようなアクティブ・ラーニングを取り入れ始めたのか、その勇気というか、挑戦というか、その理由を知りたいと思いました。

○木村克則講師 ありがとうございます。

私が想定していたのは、こんな感じかなと。今の中にもありましたけれども、成果のところもありますね。よく大学入試のことが成果で言われていますけれども、なぜ取り入れるのか、何のために。公立高等学校ですから、先生方は普通のローテーションで転勤をし

ますけれども、なぜ盛岡第三高等学校だけがこのようになっているのかということで、こういった視点を意識しながら説明をしてまいりたいと思います。御協力ありがとうございます。ここからは、ある程度一方的に話していきます。

本日の内容は、大きく5点を考えております。最初は、今千葉副委員長からもありましたけれども、盛岡第三高等学校の参加型授業がどのようにして始まったか。そして、その理由、この辺はかぶるところがありますけれども。それから、それを推進するための校内での取り組み、実際の授業を4本ほど映像でごらんいただきたいと思います。それから、参加型授業を実施しての結果といたしますか、成果といたしますか、校内が、生徒がどのようになっているのか。最後に、参加型授業の課題、あるいは展望になるかもしれません。こういった大きく五つのお話をしていきたいと思います。

参加型授業の歩み、生徒があちこちを向いていますけれども、グループを組んで英語の授業をやっているところです。

まず、皆さん御存じかもしれませんが、盛岡第三高等学校の基本のところを確認したいと思います。昭和38年開校、創立54年目の比較的新しい学校、普通科だけの学校です。生徒は男子、女子、今は若干女子が多い。普通科だけですけれども、2年次よりコース分けをします。その際に、7クラスを文系3クラス、理系3クラス、そして平成23年度からスーパーサイエンスハイスクールになっていますので、スーパーサイエンスクラス1クラス、合計7クラスです。進路は、ほとんどの生徒が大学に進みます。国公立大学の合格者数は、この春だと282名の卒業生のうち216名が合格という、盛岡第三高等学校でも指折りの高い合格率を出しました。学校の大まかな状況です。

ここから参加型授業のスタートの部分の話です。なぜ踏み切ったのか、ということです。話は10年前にさかのぼります。井上校長という先生が平成18年度に着任して、当時の様子が、平成24年度に50周年記念式典があったのですけれども、その際に文章として書かれています。スライドより若干長目の文章を読みますので、当時の校長先生の思いを共感していただければと思います。

「私が三高に着任したのは平成18年度である。直前の国公立合格者数は大きく歴史を塗りかえており、先生方に任せておればいいなという気持ちになったのも当然であった。しかし、一步校内に足を踏み入れると学校の主人公であるべき生徒に元気がない。先生方の声かけにも一瞥をくれるだけで、目を合わせようとしない。生徒の現状と三高の将来について、私と両副校長による怒濤のヒアリングと討議の日々が始まった。3人の結論は、三高を花のある学園にし、瞳輝くリーダーを育てるというものであった。しかし、その具体策の実行ということになると、絵空事に近い現実があった。私自身も学校を取り返しのつかない混乱に陥れるかもしれないという懸念をぬぐい去ることができなかった。そんな迷いを払拭してくれたのは、10月末に発覚した未履修問題で、高等学校の使命を再確認したのである。それからの動きは急で、1カ月後の職員会議でディベートという言葉は初めて使用した抜本的学校改革案を提示した。三高疾風怒濤の時代の始まりである。」

こういった文章を残しています。これはきっかけ、平成 18 年度に学校はこれではだめだということ、一番の責任者たる校長が深く認識した。

そして、2 年がたちます。2 年後、平成 20 年度、これは当時の経営企画課主任の鈴木氏の文章です。井上校長が提案したディベートがスタートしたときに、こういうふうに出ています。

「将来のリーダーたるべき三高生に必要なものは、小手先の受験テクニックなどではなく、校訓にあるとおりの大いなる志であり、主体的に生きてゆく力であったはずである。進学校として合格者数や合格率などの数値を追いかけるあまり、受験対策としてそれを支えていた「物量戦」が本来あるべき教育をゆがめてしまい、結果として未履修という隘路に迷い込んでしまったのではないだろうか。確かな学力とは、我々教員が偏重しがちだった「知識」に加え、「思考力・判断力・表現力」を含む幅広い学力である。ここから D プランがスタートする。」

ということで、ディベートを中心、柱とする総合的な学習の時間を平成 20 年度に始めたのですが、これを D プランと言って、キャッチコピーを「自ら考え、自ら学び、自ら発信」、このようなキャッチコピーを先生方に、生徒にも回してスタートしています。実質、ここが参加型授業の起源と言ってもいいと思います。

さらに、4 年がたちました。これは、50 周年記念式典の式辞の中で校長が、式辞ですので公的な挨拶ですけれども、このように言っています。

「生徒諸君は、このような予測困難な社会を生き抜くための知恵や能力を身につけた新たな社会のリーダーとなるべく使命を帯びていることを自覚してください。予測困難な社会を生き抜くための知恵や能力の土台となる力、それは「探究する力」「対話する力」「考える力」の三つであると考えています。そして、本校の次の 50 年を見据え、この三つの力を育成する新たな教育へのチャレンジを始めています。チャレンジの柱の一つは、言語活動を重視し、生徒と教師が共に作り上げる「参加型授業」であります。三高生には自分の考えをまとめ、言葉や文章で表現することが常に求められており、暗記中心の学習から考える力を育てる学習への転換を進めています。」

参加型授業という言葉自体は、平成 22 年度に当時の山田校長先生が初めて使われた言葉ですけれども、平成 24 年度の式辞の中でしっかり使われています。

参加型授業に関する年表です。今、触れたところは青い字で示してあります。ただ、先生方の授業の形は、長年培った型のようなものがありますので、かけ声だけで簡単に変わらない面もあります。参加型授業はこのくらいの歴史がありますが、学校としては今も少しずつ取り組みが進んでいる状況です。現在も完成とは言えません。発展途上、それがなぜなのかは最後の課題のところでもう一度お話ししたいと思います。

では、参加型授業を行う理由です。転勤してきた先生に、「昔、このようなものがあつたからやってください」というふうには言えませんから、今やる理由をちゃんと考えています。

3 年前から、年度初めに先生方にリーフレットを配って、何のために参加型授業をやる

のかという説明をしています。型よりも理由のほうが大事だと考えていまして、リーフレットはお手元の資料の15ページから18ページにありますので、ちょっと見ていただけますか。

1ページ目が参加型授業に取り組む理由ということで、ここが最も大事なページだと考えております。内容は、スライドにもつくりましたので、スライドへ戻っていただければと思います。

大きく三つの理由がありますが、第1の理由は、本校の「育てたい生徒像」、これを具現化するということです。本校の育てたい生徒像は、もちろん校訓のようなものは何十年も前からあるのですが、わかりやすく平易な言葉にしたものを平成22年度に先生方が全員で協議して三つ決めました。青い字で示してあるものです。「これからの時代のリーダーとなる、自主性に富んだ人間」、「進取の意欲と高い志を持ち、社会の未来を創造する人間」、そして「誠意と信頼で豊かな関係を築き合う、友愛に満ちた人間」。これは、検討に検討を重ねてつくり上げたものですので、6年がたった今でも揺るがずこのとおり、学校教育活動の柱と考えています。

このような人間を育てようとするのであれば、当然、一方通行の講義型の授業、ただ聞いているという授業では無理です。生徒が主体的、協働的に学ぶ参加型授業を行う必要があると言えます。

それから、二つ目の理由としては、文部科学省でもきちんと言っています。平成19年に学校教育法第30条に学力が規定されました。前提として、生涯にわたり学習する基盤が培われるようにということ、目先のことではないです。その上で、青い字で示した学力の3要素というものがあります。この1番の基礎的な知識及び技能、これを学力と言うときもあるのですが、ほかの二つも学力の重要な要素です。

そして、今文部科学省は、学力の3要素について、さらに議論をして練り上げている様子があります。ここには平成26年12月の高大接続改革答申に盛り込まれた内容を書きましたけれども、③の主体的に学習に取り組む態度というものが、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度というように、主体性・多様性・協働性という要素を盛り込んだような形になっています。単純な知識、技能だけではなく、幅広い学力というものを文部科学省でも推進している。

それから、三つ目です。この三つ目は、一つ目と二つ目の理由がなぜ設定されるかという、掘り下げたような視点です。これから生徒たちが生きていく社会、我々も含めて生きていく社会は個々の違い、さまざまな価値観の違いを認め合う、いわば共生社会と言えると思います。そのような社会の担い手になる生徒たちには、自分と異なる意見、考え方に触れ、自分を進化させていくことや、複数の異なる意見、考え方を生徒同士が比較検討する中で新たな知見を協働的に獲得する、こういったことが期待されます。こういった活動を盛り込んだ授業をする必要があるというふうに考えています。

文部科学省の話を少ししましたが、本校にたくさんの学校が訪問している理由が

この辺にあります。この数年、文部科学省はさまざまな文書にアクティブ・ラーニングという言葉を使っています。アクティブ・ラーニングは、直訳すると能動的な学習ということで、文部科学省がこの言葉に込めている意味は、本校における参加型授業とほぼ同義かなと思っております。

文部科学省がアクティブ・ラーニングという言葉をはじめて使ったのは、平成 24 年だと思えます。我々が参加型授業という言葉を使った後になります。青いところだけ読みます。

「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学習（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。」

この文章は、大学の教育に関する文章ですけれども、恐らく高等学校、中学校等にも来るのだろうなという予感をさせるものでした。

そして、高等学校に関するものでは、初等中等教育における教育課程云々ですね。これは、まさに高等学校、中学校等に来ましたが、平成 26 年の文書です。

「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります。」

これによって高等学校の現場で俄然注目されるようになりました。そして、この通知も同じ平成 26 年に出たものですけれども、高等学校の先生方、特に進学校の先生方が注目している大学入試に関する通知です。

「学びの量とともに、質や深まりが重要であり、子供たちが「どのように学ぶか」についても光を当てる必要があるとの認識のもと、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）」について、これまでの議論等も踏まえつつ検討を重ねてきた。」

この後は、通知が出るたびにアクティブ・ラーニングという言葉が使われていることから、詰め込みのような授業と言われ、そういった進学指導をしていた高等学校でも、アクティブ・ラーニングの導入は避けられないという認識を持って、アクティブ・ラーニングの先進校とされている本校への訪問がふえている、こういう状況になっています。

では、参加型授業の推進の取り組み、何もしなくても先生方がやってくれるのが理想なのですけれども、やはりそのための取り組みを学校全体で幾つかやっています。

まず、①としてリーフレット。これは、先ほども触れました。資料の 15 ページから 18 ページの 4 ページ分。1 ページ目の取り組む理由は触れましたけれども、2 ページ目をごらんください。資料の 16 ページですね。いろいろなことを書いていますけれども、一つだけ、真ん中のちょっと下のところに、合い言葉というのがあります。この合い言葉は、私が昨年度に着任し、学校の様子を見て、さらにもう一步推進するためにつくりました。

「生徒のために参加型 だれでもできる参加型 みんなでやろう参加型」、教員向けのメッ

ページです。参加型授業をまだ特別な授業と捉えて敬遠する先生も結構見えましたので、こういった合い言葉で、みんなで、教員みんなでやりましょうというふうにしています。これは、大きく印刷して職員室の中央、私の机の上のところに張りまして、学校全体で取り組むという雰囲気をつくっています。

それから、3ページ目はQ&A、なぜ参加型授業をやらなければいけないのかという先生を意識してつくっています。

それから、4ページ目は前年度に行われた参加型授業の例です。授業の様子は後ほどビデオで紹介します。こういったリーフレットを作成するということが一つ。

それから、二つ目は参加型授業通信です。資料では19ページから33ページまで、今年度4月から現在まで作成したものです。これも職員向けです。先生方が自分の授業をいいものにしよう、参加型視点でいいものにしよう、でも、自分たちは授業をしていて、ほかの先生の授業をなかなか見られないわけです。副校長である私は基本的に授業がありませんので、校舎を回り、先生方に紹介したい授業がある場合には、通信をつくって紹介しているということです。一昨年度からスタートしています。

スライドには昨年度の参加型授業通信で、私が書いた文章の一節を入れてあります。

「自分で科学概念を考え出したような達成感を持っていたが、実は教諭が丁寧に道筋をつけています。教師が説明するのは簡単。生徒が考え出したように仕掛けるのは難しい。教材を緻密に研究し、授業の狙いに対応した達成感を生徒が参加・活動する中で獲得する授業展開を工夫したい。」

ただ単に、理科の何とかの法則はこうなのだよと、ばばばっ、と説明して、「はい、覚えて」ではなくて、生徒みずからがそれを考え出すように、授業の中でいろいろと仕掛けをつくるのです。それで、「ああ、気づいた、先生、こうなのじゃない」、「すばらしいね」という達成感を出すような、こういった授業展開をしているということです。

それから、これは参加型授業だけではなく、全ての授業に共通するのですが、先生の表情についてもコメントしています。笑顔はもちろん大事ですけれども、ここぞと鍛えるとき、迫るときの真剣な表情、ときには叱るとき、注意するときの厳しい表情、さらに視線、こういう表情で参加型授業をしているということ。

あとは3番、それから4番、1分くらい読む時間を、斜めに読んでもらって。昨年度は1年間で参加型授業通信を17号まで出すことができました。基本的には先生方のよい点を紹介しています。悪い点を紹介しても士気が上がりませんので、よい点を紹介しています。

では、進めていきたいと思います。取り組みの三つ目は、生徒による授業評価アンケートです。生徒が受けている授業ごとに七つの視点、それぞれ4点満点で評価をしています。6月、11月の年に2回実施しています。一つ目の視点は「毎時間の学習のねらいやポイントが明確である」、「そう思う」が最高ですね。「大体そう思う」、「あまり思わない」、「思わない」、これを生徒にマークシートしてもらっていますし、生徒は国語の先生の授業について書く、数学の先生の授業について書くということで、全部書き終わるまでに30分くらい

かかるような、かなり力が入ったものです。いろいろな視点があります。六つ目は参加型授業の視点、「主体的に参加できる授業の展開になっている」。全生徒から書いてもらって集計を、これは管理職のほうでやっています。

そして、それぞれの先生に、あなたの授業の生徒からの評価は、このような感じになっていますよということで渡しているのがこの個票、これは、ある先生のある授業の個票です。見方ですけども、例えば先ほど言いました一つ目の視点、「毎時間の学習のねらいやポイントが明確である」、生徒数はここには出ていませんが、例えば3クラスの授業に行っていれば120人くらい、120人のうちの79.7%は「そう思う」と答えています。まあ、いいですね。「だいたいそう思う」が13.9%。ただ、批判的といいますか、そう思っていない生徒も少数いるのです。これを4点、3点、2点、1点で平均点をとったのが3.72ということでした。全先生の平均が3.63ですので、これは教員集団の平均より上ということで、ピンクのマーカーをして先生に渡しています。では、この先生、よい授業なのだなと思うと、必ずしもそう言えないこともこの個票からわかってくるのです。ピンクがついていない項目が七つのうち三つあります。そして、比べると、ここが結構落ち込んでいますね。五つ目の視点、「授業を通じて、学力や技能の向上が感じられる」。この先生の授業を聞いていて、自分の力がついていて感じる生徒、もちろん一番多いのですが、46.8%、ここで数字がちょっと下がっています。ですから、おおむねはよいのですが、この先生はまだ何か授業で工夫するべき点がある、あるいは力を入れるべき点がある。参加型授業はいいのです、「主体的に参加できる授業の展開」、ここは非常によいです。このレーダーチャート、赤が平均、青が本人ですが、これで見ても五つ目の視点がぐっと内側に入っている。アンケートを年に2回実施して、それぞれの先生に、副校長の私からこのような感じでしたと渡します。先生方は神妙に受け取っています。

それから、これは年間公開授業予定ということで、左のほうに第1週から第7週とあるのですが、授業参観を伴う学校訪問、いつでもいいですよというふうにしていたら、物すごく多くなってきて、学校の対応が厳しくなったので、昨年度から7週間と設定することにしました。そのかわりと言ってはなんですが、その7週間の中で、どの先生も必ずどこかで公開授業を実施するという形です。もちろん、これ以外の授業も自由に参観できるスタイルにしていますけれども、特に力を入れる授業はこのような形で、年間にちりばめる形にしていますので、年間を通じてよい授業を提供するという、そういう雰囲気をつくることに役立っているのかなと思っています。

それでは、これからビデオを4本見ていただきます。4本がどのような授業なのか概要を説明しますと、最初は化学の授業です。アルカリ金属について、通常の教科書を進むような授業です。それから、国語はグループワークで評論文の問題演習、教科書を進むというよりは評論文の問題をみんなで解こうというような授業です。それから、数学は、三角関数の勉強で、加法定理というものがあるのですが、三つの方法で加法定理に導かれるというか、導くことができる。これを、Aの方法、Bの方法、Cの方法とクラスを三つに分

けてやらせて、その三つから一人ずつの3人でグループを組んで、それぞれの違うやり方でどうだったのというシェアリングをさせるような授業です。それから、世界史は大きい単元が終わったので、大きい捉えで単元の学習内容をまとめ上げるという授業です。これを見ていただきたいと思います。

[ビデオ上映]

○木村克則講師 4本見ていただきました。この次は参加型授業を実施してということですが、引き続きビデオを1本、ほんの数十秒ですけれども、生徒が、先ほどもちらっと2人ほど出ていましたけれども、生徒の参加型授業に対する捉えの部分がありますので。

[ビデオ上映]

○木村克則講師 では、参加型授業を実施してということです。生徒が考える参加型授業のメリット、今ビデオを見ていただいたところですが、他者の考えを知って理解が深まるということ、考えに広がりができる、自分の考えを相対化、客観化できる、自ら考え、自ら発信できる。

教員が感じる生徒の変化、先ほどビデオで生徒が言っていたことですが、教員が感じるものは、参加型授業が進んで来てすぐ感じるというよりは、七、八年くらいいる教員に聞いてみたところは、大体このようなことを言っています。生徒の表情が明るくなった、平成18年度ころとの違いですね。それから、生徒が主体的になった。これは、授業中ではなく、学校行事や部活動に。大学入試以外に学ぶ意義、人生を見越したというか、そういったようなことも考えるようになった。それから、ほかの人と協働する姿勢が身についた、発表・発信する力がついたのかなど。これらの根底には、教師に対する信頼感がすごく上がっているということがあるのではないかと感じております。

これらは主観的なものですので、単なる感想ではないか、本当なのかということもあるかと思ひまして、数値を一つ御紹介します。これも主観といえど主観ですけれども、全校生徒への学校満足度調査を平成18年度から項目を変えずに行っています。たくさん項目があるのですが、五つだけ記載しています。その五つに関して、生徒に、「そう思う」、「まあそう思う」、「どちらともいえない」、「あまり思わない」、「思わない」で回答をもらって、「そう思う」と、「まあそう思う」の肯定的な回答をパーセンテージで示したのがこのグラフ、10年間のグラフです。

一番上のグラフは、「本校に入学して良かった」で、平成18年度、井上校長が生徒の表情が暗いと言っていたころですけれども、65.9%、1年生ですね、入学から半年がたって、「本校に入学して良かった」が3分の2、多くはないです、少ないですね、これが今では92.2%になっています。それから、「先生が親身に指導してくれる」は54.8%から今は80%を超える。「友人関係がよくなった」も61.8%から今は80%近く、これもふえています。それから、伸び率が大きいのは、「社会や人間のあり方について考えるようになった」、37.1%から今は68.8%。つまり、学ぶ意義について、もちろん大学入試は否定しないのですけれども、もっと先のことも考えられるようになってきているのかと。それから、「勉強が楽

しくなった」は、10年前は26.7%しかいなかったのですね、今は54.3%というように、数字の上でも結果は見る事ができるのかなと思っています。

最後に課題です。参加型授業を継続し、レベルアップも図りたいと思っていますが、課題もあるのかなと思います。四つあります。

まず一つ目は、教員の負担、これは大きいです。これは御理解いただければと思います。生徒に活動をさせるので、準備が少なくてもよいのではないかと思われるかもしれませんが、全く逆です。教材研究や授業の準備は、その量はもちろん、質の充実が不可欠です。参加型授業を準備不足で行いますと、いわゆる野放し状態のようになり、活動はしたけれども学びはなかった、ということになります。そして、先生方に教材研究が必要だと話しているのは、ここに書いていますように、生徒のモチベーションを上げる工夫をする、あるいは単語で答えられるような単純な発問ではなく、学び合いにふさわしい発問や課題を設定する。それから、50分間の中で一貫性のある構成をする、こういった観点で教材研究をしましょうと言っています。講義型であれば単純な脚本、ある意味では自分のペースでできるのですが、参加型ですとさまざまな事態を想定して準備を進めざるを得ない。さらに、生徒の思考や活動の時間をつくるには何らかの時間を、今まであった授業を削る必要があります。多くの先生は黒板に書く時間を削るためにICT機器を利用したり、先ほども映っていたと思いますが、プロジェクターを利用したり、プリントをつくったりしています。これを事前にやる負担は大きいです。参加型授業には、プロジェクターやスクリーン等のICT機器が不可欠ですけれども、実は学校には十分にありません。個人で購入して授業に持っていくという先生もいます。アクティブ・ラーニングを推進するためには、ICT環境整備のための予算措置が必要になってくるのかなと思っています。

課題の二つ目は、まだかなりの先生が旧来型の授業感にとらわれていると思います。特に大学受験をする生徒が多い、いわゆる進学校と言われる学校は、生涯にわたって学び続けるということが目標ではなく、入試突破という目標を掲げる傾向にあります。目標を入試で点数をとることというふうに限定している先生の授業は、やはり知識の詰め込み、演習問題のパターン暗記に走りがちです。先生方は、自分の受けてきた授業や、その授業をしてくれた先生に憧れて先生になっているという例もあります。それ自体は悪いことではありません。そして、自分のキャリアの中でも授業のスタイルを培ってきていますので、それを変えるということは一朝一夕には難しいことだと思います。そして、講義型でスムーズに授業をしているのに、参加型の授業に切りかえて失敗したくないという思いもあるように感じます。さらに、参加型にしながらも、それまでどおり内容を全部自分で説明してというふうにすると、授業の進度は当然おくれます。それが予測できるので、参加型に踏み切れないという先生もいるように感じます。

それから、各教員の指導力、授業力を向上するという視点です。文部科学省は、アクティブ・ラーニングの定義を、主体的・対話的で深い学びというふうに言っています。つまり、単に活動をすればいい、型を実施すればいいのではなくて、結果として深い学びにな

する必要があります。そうすると、先生方には研修が必要です。それも研修会のような大きいイベントのようなものではなく、自己研修や日々の業務を遂行しながらの研修、いわゆるOJTが大事だと思っています。

三つ目、これは逆説的なのですが、生徒を参加型に導くには、実はその先生に高い専門性や受験に対する高い知見が備わっていて、ある程度尊敬のような面がないと、なかなか生徒がついていかない。ここが結構難しいところなのです。

四つ目は、学校体制や管理職のリーダーシップです。教材研究、授業研修をするにはそれなりの時間を要しますので、業務を精選するなどして、時間を確保する必要があると思います。それから、学び合う教員集団をつくっていく。通信を発行するなどによって、いかにそういった集団にしていくか。

それから、これも副校長として気にしているのですが、参加型授業を強く勧めると、メンタル的に苦しい先生もいるのかなということも感じています。

そして、最後です。これは、授業だけではないのですが、教育活動の全てにおいて、育てたい生徒像をどのように実現していくかというカリキュラム・マネジメント、こういったところが今後一層レベルアップしていく上での課題かなと思っています。

時間をちょっとオーバーしてしまいましたが、以上で私からの話を終わりにしたいと思います。この後の質疑で、私のつたない説明が補われることを願っています。スタッフの御協力と、この御清聴に感謝いたします。どうもありがとうございました。

〔拍手〕

○名須川晋委員長 木村先生、大変貴重なお話をありがとうございました。

これより質疑、意見交換を行います。ただいまお話しいただきましたことに関し、質疑、御意見等がございましたならお願いいたします。

○高橋但馬委員 御説明ありがとうございました。子供たちが授業に非常に興味を持っているような感じはしたのですが、先生にかかる負担が非常に大きいように感じています。私は商工文教委員会の委員なのですが、委員会では、教員の多忙という部分がいつも出てきます。その部分をどのように先生方に教えているのかということと、もう一つは他校に転勤になった場合、参加型授業を継続してやっているのかどうか、その辺をお知らせください。

○木村克則講師 多忙の部分についてお話しします。盛岡第三高等学校は、授業以外にも、例えば部活動等にも力を入れておりますし、スーパーサイエンスハイスクールの取り組み等もありまして、県内でもかなり多忙な学校だと思っています。

参加型授業の準備に時間がかかるということは、私もそばで見ているとまさに感じる場所ですので、参加型授業の取り組みは学校全体でやりましょうとは言っているのですが、私はしょっちゅう授業を見に行きますけれども、講義型の先生に対して、「ちょっと先生、次の時間からはこれではだめだね」というような口調での参加型授業の推進はしておりません。自分のペースで少しずつ、一遍に切りかえるのではなく、可能などころから切り

かえて行ってほしいと思っています。

先生方は、ほとんど1年間は同じスタンスで授業をします。ですから、1年目の先生は、ほとんど参加型授業の初心者なのです。そうしますと、次の年に向けて少しずつ準備をする、早い人は夏休み明けくらいに向けて準備をする。準備をする時間をとってやろうとする先生の姿はありますし、それは私も十分理解できることですので、そこまで強く参加型授業を推し進めてはいないです。それがよいのか悪いのか、数年取り組んでいますけれども、何も予告なしに訪問すれば、講義型もたくさん見えます。もちろん完成形として講義の時間は必要ですし、そして参加型あるいは考えさせる時間も必要なのですが、根本のところでの先生方への縛りは、ぎりっ、とはやらずに、対話の中から、あるいは少し長いスパンで取り組んでもらうようにしています。

それから、他校への転勤ですけれども、実際に参加型授業を結構やられるようになった先生が転勤をし始めていますけれども、それぞれの転勤先で参加型授業を頑張っているという声も結構聞きます。そういったモデルとなる先生が全くいない高等学校も多分ないわけではないと思いますが、1人、2人いると、ああ、あんな形でいいのか、自分にもできそうだなというような形ができると思いますので、一気に全県でできればそれにこしたことはないのですが、少しずつ広まっていくということはやはり大事にしていきたいし、やってくれているという話を聞くとすごくうれしく思います。先生方が他校に転勤して、その学校の先生と一緒に訪問してきて授業を見て帰るという例も去年あるのですが、こういった学び合う動きは非常に大事だと思います。

○吉田敬子委員 きょうはありがとうございました。たまたまですけれども、最近、盛岡第三高等学校の今の生徒会長と一緒にいる機会が多くて、彼はすごく自分の意見を、答え方もそうですけれども、彼だけではなくて盛岡第三高等学校の生徒たち、他校の高校生と一緒にいるグループでの発言の仕方とか、自分が書いて出すという、そういうやりとりもすばらしいなど。最近たまたま見ていたので、彼の個性もあるかもしれないのですけれども、そういう生徒をちょうど目の当たりにしていたので、実際の公開講座も一度見てみたいなどと思いました。

一つ伺いたいのが、ICTの部分の予算化なのですけれども、県議会だと高橋元議員がICTの教育推進を取り上げられているのですけれども、全国と比べて岩手県がどのくらいおこなっているのか、小学校、中学校、高等学校の中で、私が県教育委員会で調べるほうが早いかもしれないのですけれども、ICTの予算化の部分を進めていかなければいけないのだろうなど、先生が御自身で準備されているというお話もありましたので、その部分を少し教えていただきたいと思っています。

○木村克則講師 ICT、初めのビデオの化学の先生もプロジェクターを使って授業をしていましたけれども、学校で備えているプロジェクターは多分10台です。ただ、7クラス掛ける3学年ですから、普通に考えても21の教室があつて、そして選択授業で例えば生物と物理というように分かれていますから、プロジェクターを使いたいときに必ず使えるか

というと、やはりそうではない。絶対に自分のペースで使いたいという先生は3人かな、自分で買って、必ず持っていけるようにしている先生がいます。

そういった機器の状況は、確かに私も県教育委員会にいた経験はあるのですが、全国との比較はなかなか難しいですけれども、例えば東京都の先生がこの間訪問されたとき、東京都は全ての教室にプロジェクターが備えつけてある、多分それは特別な例だと。私がいろいろほかの県に行ったときも、確かに東京都はこうですよと、ほかの県ではそうでもなかった。ただ、東京都は全ての教室にプロジェクターが備えつけてあるけれども、利用している先生はごく限られると言っていました。だから、本校のように自分で買ってまでやるという教員の真面目さといいますか、取り組みの意識の高さといいますか、それを感心して帰られるわけです。岩手県は進んでいるほうではないと思います。

○千葉絢子副委員長 木村先生、ありがとうございました。きょう、初めてアクティブ・ラーニング、参加型授業の実際をビデオで拝見して、自分も受けてみたい授業だな、こういった授業が高等学校時代にあったらもっとおもしろかったな、もっと数学、理科が好きだったかもしれないなと思いつつ拝見いたしました。特に子供たちの学ぶ意欲について、意識が大学入学というところから少し変わって、自分も社会の一員として将来どうやっていくかというところまでを含めた学ぶ価値観の变革というか、そういったものにつながっているのだなということで、この参加型授業の有効性をすごく実感したところです。

感想的になってしまうと思いますけれども、世界史の授業で見られたように、言語活動を重視していることがアクティブ・ラーニングの一番の目的なのかなというふうに思いつつ、その言語活動というものは、ただ一方的に講義を聞いただけでは全く培われないものでして、能動的に取り組まなければ営めないものであります。よく日本人は自分の意見を言わないとか、夫は家庭生活でほとんど何もしゃべらないとか、そういったことを言われるのは、従来の教育がそういう形になっていたから、言語活動の訓練を日常的にしてこなかったことが、日本人がノーと言えなかったり、リーダーシップをとりにくかったりというところにつながっているのかなと思ったりもしておりました。

それで、主語が何か端的に話す、20秒でまとめるというのは、実はニュース原稿の見出し、リードの部分と全く同じことが言えるのです。一つの文章で認識できる長さが大体15秒から20秒というふうに言われていまして、私たち記者も一つの文章を15秒から20秒でまとめるように、それを1分間の原稿で5個から6個で一つのニュースを構成するようにという訓練をずっと受けてまいりました。ですから、この世界史の授業に言語活動の全てが凝縮されているなと感じまして、このスキルを身につけていった生徒たちが、これからの世の中で生きていく中ですごく有効な教育だなというふうに理解をいたしました。

それから、先生が丁寧に道筋をつけて、子供たちが自分で解決したように持っていくということは、実は企業の管理職研修でも同じようなことが提唱されておりまして、部下が自分で気づいたということが仕事に対するモチベーションを高めていく一つのきっかけになるということも、実は企業の教育の中でも行われていることで、それが学生時代から導

入されるということは社会人としての成長にもつながりやすくなるのではないかなと改めて感じた次第でした。

いずれにしても、岩手県でさらにアクティブ・ラーニングに取り組む先生が盛岡第三高等学校を起点として広がっていくように応援していきたいと思います。本日はありがとうございました。

○白澤勉委員 御講演ありがとうございました。私から2点、まずアクティブ・ラーニングの取り組み、国も推進していると思うのですけれども、県教育委員会として参加型授業を盛岡第三高等学校以外にも広めていくように取り組んでいくのかなと思うのですが、今時点では県教育委員会からは離れていらっしゃると思うのですけれども、どのような動きになっているのか教えていただければと思います。

あと、推進する上で体制づくりというか、教員の負担という部分もあります。ただ、一度仕込んでおけば、授業の中身はまた次の年にある程度使える部分が大分あるのかなと思っておりませんが、ICTの活用、それは先生の部分もそうですし、生徒を含めた活用、先ほどの質問にも関連するのですけれども、教室全体で参加する生徒側と教師との間での取り組みとか、県立総合教育センターでも研究されて取り組まれているということも昨年ちょっと勉強させていただいて、発表会の場でも聞かせていただいています。そこら辺の様子を教えてください。

○木村克則講師 今は県教育委員会の一員ではないですけれども、わかっている状況としてお話しします。

学力向上、県教育委員会もずっと取り組んでいるのですが、従来は、特に中学校ですね、英語と数学の学力が弱いということで、教科を中心にてこ入れをするという、そういった形で進めてきています。もちろんその進めは終わったわけではなくて、現在も続いているのですが、その視点に加えて、学校全体で授業改善を進めないと、本当の意味で生徒に真の学力がつくような授業改善が進まない。従来、英語と数学を突破口に、あるいは起爆剤にと言っていたのですが、いつまでも起爆剤にしていればほかの教科はどうなのだということで、学校体制、学校を動かそうということで、去年から、中学校と高等学校の授業改善の中心となっていく先生を、その地区で一堂に会して、推進協議会を開いて、つまり学校全体として授業力を上げていくということを一緒に考えましょうということを進めています。

学校全体で取り組むということがどういうことかということ、特にも高等学校なのですが、教科の専門性の枠の中に入って学び合うということ余りしない傾向があるのです。つまり、自分は数学の先生だと、数学の授業を数学以外の先生たちにあれこれ言われたくないとか、理科の先生が、理科の先生ではないのにあなたは何を言うのだと。ところが、生徒は誰も専門家ではないのです。生徒の感覚が一番わかるのは専門以外の先生なので、私は教科の枠を超えて学び合うことが重要だとずっと言ってきたのですが、県教育委員会のほうで、中学校、高等学校の学校全体で取り組みましょうと、そして学校全体の取り組みは

教科の枠を超えて取り組みましょうというふうに言っています。その辺が昨年あたりから特徴的に出てきています。

I C Tに関しては、県立総合教育センター等で特に研究をしているタブレットを授業中に生徒に持たせて、表現活動をさせたり、発表させたりというようなものが。ただ、中心は小学校、中学校も一部ありますけれども、小学校はタブレットを実際に備えて、授業の中でタブレットに書かせて、投影して、何々君はこういうふうに考えているよとか、そういった授業ができていたところがあったはずですが、恐らく、高等学校では、そこまでできているところは県内にはないと思います。御指摘のとおり、これからの社会を想定してこういった学びになってきていますので、I C T機器、そしてタブレット等を実際に生徒に利用させての学びということは必ずやらなければならないようになっていくだろうと思います。

○中平均委員 今のお話を絡めて3点ほど聞きたいのですが、最初にI C Tの話で、プロジェクターやパソコン等を使ってということは、私は理解できるのですが、小学校でのタブレットまではわかるのですが、今のI C Tを使いましょう、やりましょうというのは、どちらかというとメーカーや業者の、もう頭打ちになっているところを何とかしてふやしたいという思いがあげすけに見えるところが非常に多くて、そういったものに振り回されずにやっていく方法はどういうものがあるのかなと、正直、私個人は思っています。実際にタブレットを持って、設備や中のソフトを更新していくという中で、どんどん古くなって行って、何年かで更新していかなければならなかったときに、その予算等を考えていくと、やはりもうちょっとうまいI C Tの使い方がないのかなと。

ちょうど5年くらい前に電子黒板を導入しようという話があつて、1台20万円、30万円の電子黒板を導入しましょうという話もありましたけれども、何年後かに更新するときに、導入費用は国で出すけれども、更新費用は自治体、各学校負担ですよということだった記憶もありますので、そういった点を含めたI C Tの利活用は当然やっていくことのほかに、そのコスト面をどう捉えていくのか。いわゆるアップデートをどういう形で行っていくのかを考えていかなければならないのかなと思っています。

あと、学力の問題ですが、この資料を見させてもらくと、国公立大学の合格者数が県下で1番ということで、どうなのでしょう、今聞いていて、新聞の中では授業のおくれや得点への反映など課題もあつたと、大学入試のための授業一色ではなくて参加型授業をやる。その趣旨は私も理解するし、すばらしいことだと思うのですが、でもマイナス面もある中で、国公立大学の合格者数がふえているということで、どうなのでしょう、やはり授業の成果がきちんとあるものか、それとも高校入試の段階で選抜されてきている皆さんの中で、ある意味盛岡第三高等学校の生徒だからふえているという面もあるものなのかという点と、あとは参加型授業に関して平成18年、19年あたりに県監査委員をやっていたとき、盛岡第三高等学校にお邪魔して、授業のやり方を変えていくのだという話をお聞きしたことがあります。そのときには、3分の1の先生は積極的に取り組んでいこうと言って、

3分の1の先生は中間層というのですか、ちょっと様子見で、3分の1の先生は消極的で、今までどおりにやっても大学への進学率は保てるのだから、なぜそのようなことをやるのだと、分かれていて、それをどうするのか尋ねたら、まず積極的な先生と中間層の先生を巻き込んでやっていくのだと聞いた記憶があります。そういった成果が今につながってきているのだらうと思うのですけれども、消極的な先生たち、今でもいるのかもしれませんが、そういった中で学校として一体感を持ってやっていく、先ほどの話の中で、ちょっとそれができない、苦手だという先生に無理にやらせているわけではないということもありますけれども、方針としてはなるべくみんなができるようにという思いもあると思うのですが、そういった点をもうちょっと教えていただければと思います。

○木村克則講師 3点ほど御質問いただきましたが、1点目が一番難しいかなと。本校で使っているICTは、プロジェクターや、よく理科の実験で使っている現物投影機、それに実験だと、化学反応を見せるようなものが主で、更新にかなりお金がかかるというものは余りないのかなと思いますので、おっしゃるところも共感するところです。電子黒板だと更新する場合にはソフトの入れかえなどの部分、実際に何かの事業として予算化をするときには、その辺がネックになってくると思いますから、そういったものを公的に手当てして、逆にまだ手をつけないほうがいいのかというものもかなりあります。それは難しいところです。これに関しては、知見を持っているというわけではありませんので、共感というところです。

それから、マイナス面をどう乗り越えていくかということですが、生徒は授業が50分間、本校であれば7コマありますけれども、本当に学力をつける活動は家に帰ってからの学習もありますし、そういったものも含めて姿勢がかなり変わったと、特にもスタートの時点からいた、長くいた教員が言っています。3年生の今、高等学校総合体育大会が終わった、あるいは野球が終わった後は、受験勉強をかなり集中的にやっているのです。そうしますと、放課後の課外の授業や、土曜日、日曜日、そういった休みに大学受験を意識した時間をとっているのですが、そういった場における学習への姿勢も参加型授業の相乗効果のような意欲的なところが出てきて、やらされているという感じがなくなっているのですけれども、自分の夢を達成するために前向きに頑張るといいますか、そういったプラスの面の効果はかなり見えているということは感じます。

これは3番目の質問の回答にもつながるのですが、確かに平成18年、19年のスタートのころは、校長先生の言うとおりでという先生が3分の1、中間が3分の1、いや、今までのやり方で実績があったのだから変えるべきではないという先生たち、先生たちも頑張っていて、頑張らせて、そして高い成果を上げていたので、私もそういった話は聞いています。その中でDプランを初めとして生徒主体の学びを進めていく中で、成果がちょっとずつ実際に見えてきた。やってすぐに変わるということではなく、3カ月くらいやって変わってきた、半年後変わってきた、1年後変わってきたねというように、ちょっとずつ見えてくることで、どうやらこの方向で間違っていないのではないかというふうに、そういった先

生方が3分の1から4割、5割というふうに、この方向がよいのではないかという実感ができてきた。

私個人のことを言えば、この前の職が県立総合教育センター、その前に県教育委員会に7年ほどいまして、文部科学省でも当然こういったことを推奨していましたから、現場に言う、こういうことをやったほうがよい、やるべきですよと話す立場であったのですが、昨年度に盛岡第三高等学校に着任して、学力はもちろんそうなのですけども、学力を含めた人間的な成長度といいますか、大きさというか、先ほど吉田委員がおっしゃいましたが、その部分を感じられました。それは、人間を育てるところの効果が大きいなど感じて、職員もその辺を感じているので、準備の大変さとか、自分のペースでできないというようなマイナス面もあるのかもしれませんが、それぞれの教員のできる範囲でやっていきたいと思いますというふうに。

○中平均委員 ありがとうございます。今お聞きして、参加型授業は自分で答えを出すだけではなく、その答えをちゃんと説明できるというか、意見を話せるということが将来につながっていくというお話であったと思っております。生きる力をどうつけていくかというところで、本当に示唆されているのかなと思ってお聞きしましたので、これからはぜひ頑張ってくださいながら、また学校機関のほうでもうまく進めていければなと思っております。

I C Tの関係については、タブレットというのは余談だったのですが、確かにプロジェクターにしても、先ほどの投影機ですか、あれもたまたま野田村の小学校に「何が欲しいですか」と聞いたら、「投影機がないので投影機が欲しいです」とか。学校に聞くと、やはりそういうところが多いと。本当に必要な機材関係はやはり整備していくべきだろうと思っておりました。

あとは、先ほどのビデオを見ていて、そうはいつでも、これだけ暑くなってきて学校にエアコンもつけられない、久慈市のあたりでは小学校全部にプールがあるわけでもないというような、それは地域の課題であると思うのですが、そういった中で教育環境にどのように力を注いでいくかということは、またいろいろと御意見をいただきながら、県議会も頑張っていかなければならない課題なのかなと思ってお聞きしました。きょうはありがとうございました。

○城内よしひこ委員 大変ありがとうございました。私から2点、お伺いしたいのですが、資料の最後のほうの学校訪問受入一覧を見せていただきました。その中で、県北教育事務所管内、久慈管内の小学校、中学校の先生方が訪問していらっしゃるようです。小中学校でも教育の、先生方の指導のあり方も含めての参考にといいことでいらっしゃると思うのですが、先生方の感想は捉えていらっしゃるのか、その辺をちょっと、ざっくりで構いませんので。

また、今後、参加型授業が、小学校、中学校にも広がっていくのか、その辺の可能性も含めてお伺いします。

○木村克則講師 資料の34ページの学校訪問受入一覧のナンバーでいいますと56番、県北教育事務所さんから連絡をいただいて、県北教育事務所管内の小学校、中学校の先生方と一緒に訪問をさせていただきという依頼があって、一団でいらっしやいました。きょう説明したようなところを説明いたしました。授業も1時間か1時間半くらい、実際に教室をめぐって見ていただいたのですけれども、1週間くらいたってから小学校、中学校の先生方の感想文をいただきました。本当にアバウトに言うと、リップサービスもあるのかもしれませんが、大学入試のためではなく、もっと先の視点を持って学校全体で取り組んでいることはすばらしいというようなことが書かれていました。

ただ、個人的には、小学校は授業そのものがアクティブ・ラーニングといえますか、子供たちのやりとりを活発にされている例が日常でもあると思いますので、正直、すばらしいと思っていただける感触はなかったのですけれども、先生方が組織的に力を高めようとしているところに少し感じていただけたようです。小学校の先生は、どうしても担任のクラスに一日中いて、なかなかほかの先生方との交流が難しいところもありますので、その辺もあったのかなど。

あと、きょうは触れませんでしたけれども、OJT、つまり通常の仕事をしながら授業力を高めるということを重視しているというお話をしましたけれども、それが少しずつ、昨年度あたりから出てきています。例えば数学の先生なら、1学年7クラスありますので、一つの学年に2人、3人と分かれています。その先生方が片や参加型授業をやっていて、片やまるっきり講義型、公立の学校としてこれで本当にいいのかということもあって、先生方が話をして、数学科であるとき一斉に参加型授業を始めたとか、こういったことも紹介していると伺って、教職員の授業力を上げるそれぞれの努力のところも、先生方の心に触れたようで、非常に心のこもったすばらしい感想をいただいたというふうに思っています。

○城内よしひこ委員 ありがとうございます。先生方の指導力が向上するのはよいことだなと今思っておりますので、これが広まっていけばよいなというふうに思いました。

あともう一点、大学の視察も結構あるようです。これは、教育学部か何かを持った大学として来ているのか、何を目的として大学がいらしているのか、その辺をちょっと伺いできれば。

○木村克則講師 大学の名前が幾つかあるのですけれども、やはり多いのは教育学部の先生方です。教育学部で実際に学生を抱えていて、これから教員になっていく学生を指導している先生が一番多いです。それから、アクティブ・ラーニングそのものを研究対象にされている大学です。学校全体でうまくやれているという学校はまだ余り多くないのです。そして、進学校でこういうことをしたら大学合格者率が下がるのではないかと、文部科学省でやれと言っても、そう簡単に教員が同じ方向を向かないというようなところで、そういったアクティブ・ラーニングを専門にされている先生方が多い。

○城内よしひこ議員 ちょっと聞きにくいことなのですが、生徒から見た先生方の

ランキングではないですけれども、この先生は教え方が上手だよねという感じのものはあると思うのですけれども、そういったことは話題に出てこないでしょうか。

○木村克則講師 例えば先ほどの授業評価の個票は、それぞれの先生方にだけ渡して、もしかすると仲のよい先生は見せ合っているのかもしれませんが、基本的には個人でやっています。当然、生徒には示していません。生徒は、多分この先生は高い点数といいですか、高い評価だろうということは、わかるかもしれませんがね。わかるかもしれませんが、かといって、この先生がよくて、この先生はちょっとというような話が校内で出て、生徒が態度を変えるということは、実際に授業を見ている中では感じられない。そうあっては絶対にだめですが、そうならないようにデータの利用の仕方を考えています。

○名須川晋委員長 よろしいですね。

それでは、木村様、本日はお忙しいところ、まことにありがとうございます。木村様からは、参加型授業の取り組み状況や生徒の変化、今後の課題など、実際の授業の映像を使いながらわかりやすく御説明いただき、大変参考となりました。

それでは、拍手でお送りをいたしたいと思います。ありがとうございます。

〔拍手〕

○名須川晋委員長 委員の皆様には、次回の委員会運営等について御相談がございます。

1月に予定されております次回の当委員会の調査事項についてであります。御意見等はございますか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○名須川晋委員長 特に御意見等がなければ、当職に御一任願いたいと思いますが、これに御異議ございませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○名須川晋委員長 御異議なしと認め、さよう決定いたしました。

次に、来年1月31日火曜日から2月2日木曜日に予定されております当委員会の全国調査についてであります。お手元に配付しております平成28年度スポーツ・教育振興調査特別委員会調査計画（案）のとおり実施することとし、その他の詳細については当職に御一任願いたいと思いますが、これに御異議ございませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○名須川晋委員長 なお、御希望の調査先、調査内容等がございましたら、御意見をお寄せください。

御異議なしと認め、さよう決定いたしました。

以上をもって本日の日程は全部終了いたしました。

本日はこれをもって散会いたします。